

大蛇山の魅力を探る



六山競演では、花火と煙幕で互いの山が見えないほどに

多くの人を魅了する大蛇山

大蛇山は江戸時代に三池地方で始まり、明治時代になって、大牟田祇園は三池祇園にならって大蛇山を作り始め、大牟田の各所に広まりました。これが「祇園六山」で、各山は大蛇山を祭礼行事として奉納しています。祇園六山は、古いしきたりと伝統があり、それぞれの山に特色があります。

各地区から繰り出された長さ10メートル以上もある大蛇山が、火煙を吐きながら練り歩く「六山巡行」は圧巻で、おおむた「大蛇山」まつりのメイン行事として行われます。令和元年の今年は、7月27日に開催。三池本町祇園宮が一番山となり、巡行・競演と勇壮な姿を披露して、見物に集まった多くの皆さんを魅了しました。



大牟田祇園六山振興会
会長

相川 浩一さん

昨年と同様、露店の位置などを調整し、歩道を広く空けました。また、六山競演を分散し、人の集中を避けたことで、安全に見学できたのではないかと思います。今年も例年以上にメディアにも取り上げられたため、市外の人にも、より「大蛇山」の魅力が伝わったのではないのでしょうか。9月28日には、熊本で開催される、九州・山口の祭りが集結する「祭りアイランド九州」にも参加します。大牟田市が誇る大蛇山の魅力が、多くの人に伝わるようにがんばってきます。



まつりが盛り上がるのは各山の協力があってこそ。感謝です

歴史と伝統を守り続ける六つの大蛇山



三区八剣神社



三池藩三池新町彌劔神社



三池本町祇園宮



諏訪神社



本宮彌劔神社



大牟田神社第二区祇園

各山それぞれ、作り方から、形、配色などが違います。また、大蛇山には雄と雌があり、三池本町・第二区・諏訪が雄、三池新町、三区、本宮が雌と呼ばれています。

一万人の総踊り

六山巡行とならび、おおむた「大蛇山」まつりを盛り上げるのが、「一万人の総踊り」。企業や団体などから集まった多くの市民の皆さんが、炭坑節と大蛇山ばやしを楽しく踊って、まつりを盛り上げます。

沿道にはたくさんの店が並び、浴衣に着飾った人などが思い思いに楽しみ、大牟田市が最も熱くなり、盛り上がる一日となっています。





大牟田市無形民俗文化財に

指定されている三池の二山

祇園六山の各神社は、大蛇山を祭礼行事として奉納しており、その歴史・しきたりを重んじています。

六山巡行を終えた三池の二山は、その翌日、それぞれ地域を巡行します。ワッショイワッショイの掛け声とともに、子どもたちの奏でる樂の音色が町内に響き渡り、古き良き時代からの伝承を感じます。

夕刻になると、二山は三池地区公民館前に集結し、合同の祭礼行事が行われます。無事に終了すると、二山は火花と煙幕を飛ばし合い、最後の競演を行います。

その後、二山は再び巡行しながら、各神社へ帰り、魂を抜くために、山崩しが行われます。御神体である大蛇の一部を神棚や玄関などに御祀りすると神威にあやかると伝えられており、子どもたちによる争奪戦が繰り広げられます。形が無くなった大蛇山は、翌年に再び無の状態から作られていきます。



三池本町祇園宮
堺 賢一郎さん

大蛇山の製作を主に任されるようになり、10年以上になります。毎年2月には準備に入る長丁場の関わりですが、歴史ある行事のため、苦勞というより、むしろありがたく思っています。そのため、最後の山崩しの時は毎回感極まります。子どもたちが大蛇の角や牙などをつれしように抱えている姿を見ると、疲れも吹っ飛びますね。

これからも、三池の名に恥じないよう、歴史と伝統を守りながらがんばります。



三池本町は雄大蛇。荒々しい雰囲気を出すよう、色合いなどに気を遣っています



最後の巡行を終え、山崩しへ



江戸時代から脈々と続いている大蛇山。親から子へ、子から孫へ、地域の力があればこそ、続けられる伝統行事です。大蛇の一部を誇らしげに抱える子どもたちには、しっかりと地域への愛着が育まれています。

大蛇山を見に行けない人の所へ

三池本町では、大蛇山を見に行くことができない人のために、トラック大蛇を製作し、施設や病院などを巡行します。訪問先では、皆さんにお清めをして、御利益を願います。毎年楽しみにされている人も多く、巡行はとても喜ばれています。



1人ひとり、お清めします

保育園にもお邪魔し、かませを行いました



三池本町祇園宮神社会長
中野 義治さん

今年は祇園六山の一番山でしたので、六山巡行にも御前山で参加しました。江戸時代に藩主から下賜されたとの伝承を持つ由緒ある山車ですので、見物に来られた皆さんからも喜ばれました。

製作から巡行まで、たくさんの方が関わることで、伝統行事を守ることができています。本当にありがとうございます。子どもの数が少なくなり、不安な部分もありますが、地域の力を結集して、これからもがんばってまいります。



神社の境内で樂を練習をする小学4～6年生

大蛇山の魅力を

もっと多くの人へ

祭礼行事である「大蛇山」は、その歴史も古く、さまざまな言い伝えがあります。祇園六山振興会の相談役である熊崎俊春さんに話を伺いました。

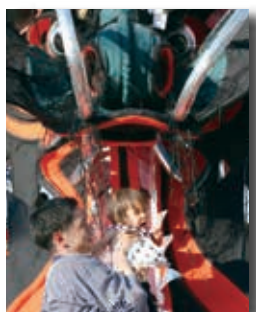
わが国では、古くから蛇や龍を水の神とする「水神信仰」がありました。また、江戸時代初めに祭神を悪病除けや農業の神とする祇園のお宮が造られ「祇園信仰」が広まりました。この2つの要素が絡み合い、祇園の祭りに大蛇が取り入れられ「大蛇山」という形ができあがったと考えられています。寛永17年（1640）、三池藩立花氏によって、三池新町に祇園宮を建てられたことが始元ですが、「大蛇山」がいつから作られ始めたかは、正確にはわかっていません。しかし、嘉永5年（1852）に、「大蛇山」の原型とみられる文書の記述があることから、それ以前から作られていたと考えられます。柳川藩立花氏による祇園信仰に由来する三池本町の大蛇山も、ほぼ同時期と思われる、三池地方で二つの

大蛇山祭りが行われていました。大蛇が火を吐くのは、田畑の害虫駆除を行い、五穀豊穡を願うため、煙幕は家の中に入れて、悪疫退散を願うためと言い伝えられています。大蛇山が地域を練り歩くのはそのためです。明治時代に入ると、三池の山にならない、本町や諏訪町でも大蛇山が作られるようになり、他の地域にも広がっていきましました。各山独自の進化を遂げ、さまざまな違いがあります。三池の二山は「祇園楽」を受け継ぎ、掛け声も「ワツシヨイ、ワツシヨイ」です。他の地域の演奏は「おはやし」であり、掛け声も「ヨイサ・ヨイヤサ」です。大蛇の顔や形、色も違います。先に述べたように、大蛇が火煙を吐くのは古くからのしきたりですが、火薬を使用している祭りは、日本でも珍しいことです。



三池新町彌劔神社総代会長
大牟田祇園六山振興会渉外担当相談役
熊崎 俊春さん

見上げるほどの大きな山から、花火と煙幕を飛ばし合う姿は圧倒的な迫力があり、他ではなかなか見ることができない、大牟田の自慢の祭りです。また、昔の原型をとどめていることも奇跡に近いものがあります。この市民を魅了してやまない大蛇山を、もっと多くの人へ伝えていきたいですね。



歴史ある大蛇山が

後世に受け継がれるように

